
[ガルクサイル！！ガルクサイル！！！]

muku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ガルクサイル！！ガルクサイル！！！」

【Nコード】

N9743V

【作者名】

muku

【あらすじ】

え、さっきあらすじかいたやんなんできえてんの？

奇跡の始まりだお

「ガルクサイル！！ガルクサイル！！！」

- - - 朝

「ふるばーにんぐ！！」

少年は目覚めとともに大声で魂の声塊を叫ぶ。

魂の叫びを発した少年は、幸せそうに見えて窮地に立たされているところだ。

意識がはつきりしてきた少年は、枕元に置かれた目覚まし時計を手にとった。

「バカナ、コノワタシガ、コノヨウナシツタイヲ・・・」

少し大人びた顔を持った少年がこの物語の主人公、

小川 雅彦^{まことひこ}である。

普通の家に住む、どこにでもいる少年。と本人は信じている。だけ。なんという番狂わせだ！ありえない！世の中不条理だ！心の中で世界に対する不満をぶちまけながら

雅彦は急いで支度を済ませる。

「いつてきまーす」

「お前は、息をしているのか？声が聞こえんぞ、モット生氣を出しな！！！！」

「イエス！！ボス！！」

朝から母親の活を胸いっぱいを受け止め俺は旅に出た。

「ここから、自転車で秒速5メートルの速度で走れば・・・間に合う！！」

自転車にまたがり、腹をくくる。

「雅彦、3号機出る！」

1号機、2号機は歴戦の中で名誉の大破を遂げ雅彦に別れを告げて

きた。

だが大破をした理由は聞かないで欲しい。雅彦の胸が苦しくなるからだ。

自分に気合を入れ、ペダルに足を固定させる。そして勢いよく自転車をトップギアでこぎ始めた。

なかなか出来るこの自転車、想像以上のスペックを発揮してくれる。と自転車の性能に感動しながら通学を開始。

この3号機は、昨夜ロールアウトしたばかりだ。雅彦にとっての新たな相棒であり、彼らにとっても今日が初陣であったのだ。

通学を始めて10分ほどすると見覚えのある後姿を持つ女の子が雅彦の先に見えた。

ブレーキかけるしかないだろ常識的に考えて。雅彦は女の子に近づくと自転車のブレーキレバーを全力で引いた。

「おはよ〜」

「おつはよだおー」

幼馴染って良いよね、世界中の男子6割は幼馴染の女の子に憧れるだろう。と雅彦は心の中でつぶやく。

路面から煙を出すほどの迷惑気まわりの登場をした、自称どこにでもいる少年（笑）。そんな胡散臭い少年に驚きもせず微笑みながら「おはよ〜」と言ってくれたショートカットの女の子。

雅彦とは幼稚園からの付き合いで、いわゆる幼馴染である。

名前は瀬川 奈美^{なみ}。

顔は周りと比べてもかわいい方だ・・・いや普通に可愛い。さらに面倒見が良く、

勉強、運動もトップレベルであり、ドジッ娘属性0%の完璧超人である（笑）

いつも成績は下から数えた方が早い雅彦にとっては最高の友で、良い相談相手。こないいい子と仲良しだから優越感もあるんだよ。

しかしテスト前になるとがり勉強モードになってしまいノートを借りることが出来ない。

別にノートがなくなつたつてテストは受けれるもん！こういうときに
使い物にならないなんてかわいそうな娘ね。

自転車のスピードを上げたのもこいつに追いつくためだった。

「雅彦、今日も齒磨いてないの？」

「ばっ、なにいつてんの？俺は、俺は」

「おっけ、皆までいわんでよろし」

「だよね」

そんな他愛のない会話だが、二人にとっては日課になっている。

「そういえば、雅彦つて進学するの？」

「奈美が行く大学にいくよ！俺は！」

「今日は一段と暑いね。頭大丈夫？」

「今のあんたが持てる学力じゃ私の目指す大学には到底入れません」
怒鳴るようにして、雅彦に釘を射した。

「あっひゃひゃひゃあ」

言われたことが図星であつた雅彦は動揺を隠すために空笑いをする
が、かえつて焦りを見透かされる要因となつた。

この優等生はいつも辛口コメントで、俺を楽しませてくれる。現実
に叩きつけることが得意のようで、冗談は通じない強敵だ。

それでも心はチクチク痛むんだぜ。

「私と大学に行きたかつたら、勉強しなさい、付つきりで教えてあ
げる」

「奈美は自分の勉強しなくていいのかよ？」

「君と違つて毎日してるしね、余裕」

確かに奈美は、毎日欠かさず勉強してるし反論の余地はない。こい
つが勉強教えてくれるつて言っんなら損はない。むしろ・・・OK
「・・・」なんだこの心落ち着かない嫌な感じ。

先ほどまで話に華を咲かせていた彼だが何か異変を感じ取つたよう
だ。

「どうしたの？」

奈美の声でハッと我にかえる。

「いや、なんでもないし！そんなことより時計見るよ、面白いことになってんだろ？」

「ちよつとっ！あんたがべらべらしゃべってるから遅いっ」

奈美が激怒しようとした刹那、雅彦の足が無意識に学校に向けられた。

歩くのではない、駆け出したのだ。

この感覚、背中を伝う悪寒……悪意、いや殺意を感じた。

その感覚を雅彦は知っている。振り向けば災厄が降りかかるのも知っている。

「ちよっど、どうして……ぎゃあ」

「雅彦せんぱー……い……い……!」 雅彦を呼ぶ声とともに、奈美は何者かによって押し倒されたのだ。

だがそんなことはどうでも良い、雅彦に突進してくる殺意から逃げ切るために走る、だが雅彦を呼ぶ声は尚いつそう近くに聞こえてくるのである。

「おおおおおおお！逃げろおお！俺！！無理、ダメだ、ありえない」

もう逃げ切ることは不可能だと悟った雅彦は、走っていた足を止め、自らの身体を衝撃から守る体勢に移行した。

「アメフトー！！！」

ドスッ！という音とともに雅彦の腹に意識が吹っ飛びそうなほどの衝撃が与えられた。

胸いっぱいこの衝撃を受けるとともに雅彦は地面に崩れ落ちた。

「チヨベリバ・・・グッハ」昔に流行ったこともないであろう言葉を何故かぼそつと言ひ撃沈。

「おひさしぶりです！先輩！！」

崩れ落ちた雅彦の前で微笑みながら喋りだす少女、この子が殺意の正体であった。

天使のような微笑、悪魔のような破壊力を見せてくれたこの少女は、まだ幼さの残る顔で、ツインテールの娘。小学生と言っても信じて

もらえそうだ。

「コラッ！朝っぱらイテエだろうが！むしろイテエってレベルじゃねーよ！！犯すぞリンス！」

腹部に残る痛みを堪え、雅彦は怒りをあらわにする。

この少女の名前は結城「フローシア」リンス。雅彦と奈美の一つ下で、後輩にあたる。

とえりあえずハーフラしいのだが詳しいことはわからない。

わかるとするならば「猪突猛進」と言うことだけだ。おそらく前方には視界を向けてはいないだろう。

「だって15時間ぶりだお、見つけるとつい犯っちゃうんだ！」

「だからって俺の腹目掛けてタツクルしなくてもいいじゃねえか！」

そう。このタツクルは通学途中毎日なのだ。日々腹痛に悩まされているのは言うまでもない。

「まったく。普通に登校できねえのか？お前は」

「むー！可愛い後輩が毎朝抱きついてあげてるのに〜！」

「うそつけっ！さっきつい犯っちゃうんだ　って言ってたじゃねえか！」

全国の子には失礼だがリンスも女子の中では高ランクだ。しかもその愛想の良さで、自らの想いを告白する男子はキリがないという。その度にリンスは勇気を振り絞り想いを伝える男子達をことごとくに振っている。可哀想な話だぜ、ホント。

「ほら二人とも、意味も解らない討論してないで早く学校いくよ、遅刻しちゃうでしょ！」

「すみません・・・」

「ういサーセン」

この流れが雅彦たちの朝なのだ。

雅彦たちの通っている学校は十字路の向こうに位置している。信号を超えれば登校したも同然だ。

しかしこの信号は長い。そのせいで遅刻し悔しい思いをする生徒も少なくはない。

雅彦たちは後一步というところで赤になってしまい、信号無視するわけにもいかなないので気長に青になるのを待った。

他にも信号待ちしている生徒が何人かいる。学年は様々だが、個々が友達と話している。

（やっぱり長いな、ここの信号は）

そう思っているうちに信号の色は青になり。まだかまだかと待っていた生徒たちが急ぎながら歩みだす。

雅彦たちもそれにつられ歩き出す。

「こんな速度曲がれるはずがねえ」

その時、一台のハチロクが信号を無視して交差点に向かってきた。しかもこっちに向かって・・・

「ほえ？」

あちこちから悲鳴が上がる。

三人とも動けずにいた。当たり前だ。咄嗟の出来事に足が動かない。

（え？な、なに？どゆこと？）

状況が理解できない雅彦。しかし時間だけはゆっくりと動いているように感じた。

「これで、3回目かよ。早かったなお前ともお別れだ」

（ああ、俺ハチロクに撥ねられるじゃん。）

そう思った瞬間、ハチロクが雅彦たちにぶつかった・・・

「予想的中！でも大丈夫これで3回目だもの！」

（・・・ん？）

「ここどこだ？知らない天井だ。言ってみただけ。いやマジで知らない部屋、ベッド、そして俺の着ている服。」

目が冷めた雅彦は目をこすり、周りをみわたし自分の体に見入った。この見知らぬ部屋は、よくファンタジー漫画などで出てくる、中世ヨーロッパ調な構造をしている。もちろん雅彦の着ている服も、

異世界物で出てくるキャラクターが身にまとっていきそうな服と言うよりも衣装であった。

「これは、どう考えても俺が執事って設定だな。汗水流しお嬢様のお世話に命を掛けた結果、力尽きて眠ってしまったと。目が覚めた俺の前に

お嬢様がやって来てあんなことや・・・こんなことが起こるっていう夢なんだな！」

「でも、確か俺はハチロクに撥ねられて・・・ぐへえ、もう豆腐なんて喰わねえ。」

雅彦がぶつぶつ独り言を呟いていると、見知らぬ部屋に見知らぬ中年男がやってきた。この男もコスプレしているようだ。

この時点で雅彦の妄想は終了。夢のはずなのに現実に叩きつけられた。

「お目覚めになりましたか！ゴルグラッド様！」

見知らぬ中年男性は部屋に入ってくるとともに雅彦に、歓喜に満ちた笑顔で話しかけた。

「いやいや、セバスチャン、私は小川 雅彦というお名前ですよ。

おふざけはよろしくない。たとえ設定でそのような名前だとしても受け入れはしませんよ。

早く私をお嬢様に会わせさせていたきたい。」

雅彦は、中年男を勝手にセバスンと名づけ、お嬢様に会わせると催促する。だが中年男は雅彦の言っている内容を理解出来ない様で

二人の会話は成立するはずもない。

「ゴルグラッド様・・・記憶がお戻りになられていないのですね。ではこの世界の理と、今の状況をご説明させていただきます。

ちなみに私の名前はセバスチンでなくガバスでございます。」

「はあ？話の流れが速いでございますですよセバスン。なんのことやら解りませんがすごい設定なのですねセバスン。

まあ聞いてみましょう興味深い話ですし。」

雅彦はセバスチャン・・・ではなくガバスの話を素直に聞くことにし

た。

「セバスン・・・ですか。まあ気にしないでいましょう。では
説明に入ります。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9743v/>

[ガルクサイル！！ガルクサイル！！！]

2011年10月9日15時23分発行